

第二十八章
キャリア

百歳を超えて今なお評論家として活動するコーディネーターが初めて声を上げる。

「私は戦後しばらくして中央官庁の公務員に採用されました。その頃は人材がなく国会議員も公務員も若かった。みんな必死になってこれからの日本をどうするのか真摯に話し合いアイディアを絞って寝食など忘れて働いた。もちろん満足な食事ができるほどの食糧はなかった」

急にそのコーディネーターが涙ぐむ。

「それまで日本を牛耳っていた人物は自害したり、戦争裁判で失脚したりした。だから未熟な若者が戦争でボロボロになった日本の復興に邁進しなければならなかった」

一番若い女性のコーディネーターが口を開く。

「長老」

「長老？ 私のことか？」

「はい。尊敬を込めてそう呼ばせて頂きます。質問してもいいでしょうか」

長老と呼ばれたコーディネーターが頷く。

「その頃、キャリア制度というものはあったのですか」

「元々キャリア制度というものは存在していなかったと言うか、そのような制度は法律上存在しない。つまり慣習化した制度です。公務員制度の最大の問題点はキャリア制度だけではなく、そのような訳のわからない様々な制度がなぜ慣習化したのかという点です」

「前例踏襲主義のことですね」

「おっしゃるとおりです。物事が前に進むと本当は国民が頑張った結果なのに自分たちの力だと錯覚するようになった。ちょうど設計士が、大工の腕で立派な家が完成したのにもかかわらず、設計図を自慢するのに似ている。つまり大臣や官僚たちは自分が日本を動かしているのだと錯覚した。国民はもちろんのこと、現場の公務員の努力を評価しなかった」

長老が言葉を続けようとしたときやはり若い男性のコーディネーターが質問を差し込む。

「官僚と公務員とはどう違うんですか」

「官僚というのは中央省庁に在籍する幹部です。公務員に違いはないのですが国家の政策決定に大きな影響力を持ちます。しかし、その数は全公務員の一パーセントもいません。高級公務員、いわゆるキャリア公務員です。話を続けてよろしいでしょうか」

質問したコーディネーターを含む全員が聞き手に回る。

「さて徐々に日本が復興すると官僚は自分たちを頭のいいエリートだと勘違いし始めた。成功は自分の力で勝ち取ったもので失敗は社会や政治のせいにするのが人間のサガです。しかし、国家を動かす人は成功は偶然か国民の努力によるもので失敗は自らの過ちであることを肝に銘じなければならぬ。ところが、成功したときは自画自賛、失敗すれば責任逃れに終始する」

逆田が納得顔の数を確認してから長老コーディネーターを促す。

「キャリア制度の詳しい解説をお願いできますか」

「分かりました。さて高級官僚は政局に明け暮れる政党と距離を置いて人材確保に奔走しまし

た。なにしろ戦争で人材が枯渇していた時期ですから、優秀な人材を集める必要がありました。もちろん事情は民間企業でも同じでした」

「時代が時代だけに、十分な給料など払えなかったのでは？」

意外にも先ほどの若いコーディネーターが質問する。

「そのとおりです。だが一方では安月給でも働かざるを得ない人がわんさといた」

「それでどうなったのですか」

長老が完全に主導権を握る。

「こういう誘いをしました。『給料は低い。だが、首になることはない』と。そのころの民間企業は今日儲かっても明日は倒産するかも知れないといった状況でした。皆さんならどうしますなんて野暮な質問はしません。そしてこれ以外に次のような裏取引があったのです」

核心が近づいていることを逆田を始め全員が、そしてこの放送を見ている両大家はもちろん田中や山本も瞬きすることなく、しかも目薬をさすこともなく見つめる。

「中央官署で働くには高度な学力や教養が必要です。そうするとその当時では帝国大学の卒業生がふさわしい。この方針が後々尾を引くことになる。戦争で食うに食えなくて高校や大学への進学を諦めざるを得なかった有能な若者がここで切り捨てられた。時間があればこのような境遇にあった若者の素晴らしい活躍を紹介したい。さて数少ない大学の中で、旧帝国大学はそこそこの歴史があり、優秀な人材を輩出してきたけれど、その数は知れていた。むしろ戦前は

小学校……昔は尋常小学校と言われていたが……」

逆田がやさしく長老のコーディネーターに告げる。

「昔の呼び方は気にせずにしてやべってください。今のところ分かりにくいところはありません」
「お気遣いありがとうございます。えーと、そうそう、小卒や中卒でも社会に出て知恵を絞って一人前に働いている子供がたくさんいました。社会という学校でそれなりに知識を身につけて起業した者や政治家や公務員になった者もいました」

「机上の理論より実学ですね」

「確かに論理思考に関しては学問を修めた方が有利でしょう。難しい言葉ですが、演繹的に物事を考える方が効率的です。しかし、実践を通して帰納的に物事を組み立てることも非常に有効な方法です。いずれがすぐれているかという問題ではなく、いずれも大事な思考方法です。さてここで一気に核心に迫りましょう」

逆田の視線を意識した長老のコーディネーターが一呼吸置く。

「旧帝国大学の流れを汲む国立大学を卒業した優秀な学生を高級公務員、つまり幹部候補生として採用しました。将来それなりのポストを約束して採用したのです。しかし、社会を知らない、しかも恵まれた環境の元で大学を卒業した人たちは即戦力にはなりません。ここで誤解のないように申しあげますが、恵まれた環境と言ったのはある程度学業に専念できるという程度の意味で、ほとんどの学生は今の学生とは違って苦学を強いられていました。当時の環境では

勉強するという意味において中学生や高校生より恵まれていたという程度の次元です。いずれにしても学歴が幅をきかすことになる種が蒔かれました」

長老のコーディネーターが言葉を切って逆田を覗き込む。

「私ひとりが発言し続けてもいいのでしょうか。それに放送時間は」

「まず、時間については心配無用です。つまり無制限です。それに他のコーディネーターは今のところ長老教授の聴講生です。私もそのひとりです」

「恐縮します」

「教授、講義を続けてください」

「分かりました。さて大卒だと言っても社会人一年生です。この幹部候補生を育てるためには現場を知りつくした下級官吏、いわゆる公務員を養成する必要があります。頑張つて勤め上げれば最後は末端組織の長、たとえば、警察署長や税務署長になれるというふれ込みで大量の低学歴の人間を採用しました。ところが先に社会に出たこの人たちがよく働く。しかも現場にいますから調整能力に長けている。大量採用されていますから競争も厳しい。更に将来小さな組織の長になることもなく不遇な待遇が待っていることなど知らずに黙々と働く。この人たちの知恵や努力が日本を活性化しますが、その手柄はすべて先ほどの幹部候補生である官僚に吸いとられてしまう。それでも一所懸命働く……」

長老コーディネーターが目を閉じる。涙を堪えているのだ。

「見苦しい姿を……申し訳ありません」

「休憩しましょう」

「休憩は必要ありません」

ズボンのお尻のポケットからクシヤクシヤのハンカチを取り出すと目頭を押さえる。そして一度咳払いをしてから長老は張りのある声を取り戻す。

「政府の底辺を支えた人々、いつの間にか官僚ではない公務員のことをノンキャリア組と呼ぶようになりました。一方、採用試験が制度化されて、つまり二流の大学生や高校生が齒が立たない試験制度が実施されると、結果として学歴で将来の出世が決まってしまう。ここで採用試験の難易度で、事務方のトップにまでなれるキャリア組と、頑張っても末端組織のトップにしかないノンキャリア組とが完全に峻別されました。学歴カースト制度、或いは採用試験カースト制度の誕生です」

「こんな経験をしたことがあります」

発言を求める中年男性のコーディネーターが手を上げる。長老に休憩が必要だと思っていた逆田がそのコーディネーターを促す。

「林さん。どうぞ」

「取材である税務署に行ったのですが、署長は三十歳手前の若い人でした。私は毎年その税務署を取材するのですが、そんな若い署長は初めてでした。色々質問しても応えるのはその署長

の親のような白髪の副署長でした。そこで初めてキャリア制度を知りました。その副署長は一年前に赴任してきた人で、前回の取材時は当時の署長には付き添いされませんでした。当時の署長はそこで定年を迎えました。もう時効だから披露しても問題はないでしょう」

逆田が頷くとそのコーデイネーターが興味深い話を暴露する。

*

林は副署長室に案内される。

「どうぞ、お掛けください」

副署長は林が座ると苦笑しながらゆっくりと座る。

「子守みたいなものですよ」

「署長は一年で交替するのですか？」

「大概そうですね。まれに二年ということもありますが」

「副署長は？」

「大概二年ですね。まれに一年ということもありますが」

「今度の署長は若すぎますね。署長の重責が務まるんですか？ 今日の取材でもリクエストしていないのに統計的な観点からのこの管内の状況を説明して頂きましたが、結局私の質問に具体的に答えて頂いたのは副署長でしたね」

苦笑しっぱなしの副署長の顔が真顔になる。

「私は定年まであと一年半ですが、今年辞職するつもりです」

「えっ、どういうことですか」

「林さんだから安心してしゃべりますが、ほとほと疲れました」

応接の椅子の背もたれに全体重を掛けるように座り直す副署長に林が尋ねる。

「なぜ、あんな若い人が署長なのでしょう。以前、税務調査はある意味、納税者との戦争だと聞いたことがあります。先ほど署長に権利意識が高まる納税者にどのように対応されているのかを伺ったとき、すぐさま副署長が答えられましたね」

そのときドアをノックする音とともに若い女性職員が入ってくる。テーブルにふたつの湯飲み茶碗を置くと軽く会釈して部屋から出て行く。

「ありがとう」

そう言うってから副署長はその茶碗の湯気を見つめながら林に勧める。

*

「林さん、話を続けて頂いても結構ですよ」

「時効だからと思っただけしゃべりましたが、何か引っかけがあります。もう四、五年前のことなのに」
「長老がおっしゃっていたキャリア組の署長の面倒を見るのが副署長の仕事だと勝手に解釈しました」

「そうです。現場を知らない若いキャリア署長を無傷で大蔵省に返さなければならぬ。そん

な署長が赴任してきたときに運悪く副署長のポストにいと、胃が痛むほど気を遣わなければならないそうです」

「それが引き金で定年を一年残して退職するということですか」

「もちろん、それが原因のひとつではあります」

「と言いますと、他にも辞める理由があつたのですか？」

「そうです」

「どのような理由ですか」

「長年勤めた税務職員は辞めると税理士になることができます」

「普通は税理士試験に合格しなければ税理士になれないでしょ？」

「そうです。合格率の低い厳しい試験です。合格するのに何年も掛かる場合が多いと聞いています」

「税務署に勤めていたら試験なしで資格が取れるのですね」

「昔はそうでしたが、今は内部試験があります」

「内部で？」

「税務職員も他の公務員と同じで縦割り組織があつて特定の税金の仕事しかしません」

「定年まで同じ仕事をするのですか」

「五十歳前後で管理職にならない限り、たとえば法人税の仕事だけをします。たまに他の税法、

たとえば所得税の仕事を一、三年する場合もありますが、退職まで同じ系統の仕事をし続けます。つまりひとつの税法に特化するのです」

「言葉は悪いですが、専門バカを養成しているのですか。そうすると他の税金のことは余り知らない訳ですね」

「そうです。かといって税理士試験を受けた人が横断的にあらゆる税務に精通しているかと言えばそうではありません」

「こんな税金があるのかといった類いの税金がありますね」

「珍しくも何でもありませんが、たとえば健康保険は実は税金なのです」

「えー、社会保険料の健康保険が！」

「健康保険税という立派な税金です。法人税や消費税のように一般会計の財源に組み込まれるものではありません。市町村に納付して病気やケガに備えて医療費を互いに負担して支えあう財源となるものです。この健康保険税については税理士より社会保険労務士が詳しい。税金というのは税法という法律だけで動いているのではなく国税であれば国税庁長官が出す通達で実務は動きます。税法だけでも難解なのに法律より量が多い通達が幅をきかせます」

「いわゆる通達行政のことですね」

逆田が林の話に何とか追従する。

「ですから縦割り組織が必要なのです。何十年も同じ仕事をしなければ理解できないのです。」

しかも通達にも書かれていない前例や慣習がはびこっています。それは空気なようなもので、長年の経験がなければその流れを理解できません」

「組織にはびこる慣習。民間企業ではそれが成長を阻害して最悪の場合倒産することもある。国や都道府県や市町村は潰れることがないから、慣習はゾンビのように永遠に生きながらえるということですか」

「高度な専門知識はもちろんのこと、管理職になって実務を忘れても組織に流れる独特の空気を掴む嗅覚は健在で、退職しても税理士としてその嗅覚を生かすことは可能です」

「なるほど。そうやって退職後も結構いい収入を得るのですね」

「ところが現実は大大きく変化しました。退職後税理士で食っていくことが難しくなったのです」
「？」

逆田が絶句するのを尻目に、林が先ほどの副署長との話を再開する。

*

「どうも、定年が延びるようです」

副署長が茶碗を置く。

「定年は確か六十歳でしたね。民間と同じ六十五歳になるとでも」

「いいえ、そう言う意味ではありません。定年は六十歳ですが、管理職になるとその一年前の五十九歳で辞めます。昔は二年前、もつと前は三年前……。ともかく、早く辞めなければなら

ないというルールのもとで、それを錦の御旗にして早期退職して税理士事務所を開業する職員に国税局が顧問先を斡旋していました」

「そんな！」

「林さん、知らなかったのですか」

「お恥ずかしい。だから二流記者なのか」

副署長の表情が緩む。

「そんな林さんに親近感を覚えます。だから告白する気持ちになったのです」

「なんか、褒められているような、けなされているような……民間人が聞けばうらやましい制度ですね」

林の苦笑に完全に打ち解けた会話に変わる。

「余り感心した制度ではありませんが、どうやら近々廃止されるようです」

「自分で事務所を持たなければなりませんから『天下り』ではないのですが、税務調査の対象になるかも知れない企業に『いい職員がいるから顧問にしては』などと斡旋するのはおかしな話です」

「副署長をかばう訳ではありませんが、斡旋を期待する企業も多いのでは」

「おっしゃるとおりです。何かと煙たい税務署員を顧問にすれば、それは強い味方です。皆ま
で言う必要はありませんね」

「でも、幹旋制度がなくても税理士事務所を構えれば顧問先を獲得できるのでは？」

「国税庁に限ったことではありませんが、特に国税庁は強烈的な縦割り組織です」

「存じております。背番号と呼ばれているものですね。法人税の担当者は辞めるまで『法人』という背番号で転勤を繰り返す」

「私の背番号は『徴収』です。一時期、所得税の調査もしたことがあります。それはわずか二年に過ぎません。法人税の申告書を書けと言われても書けません。私のような背番号を持つ者にとって幹旋は非常にありがたい制度です」

「それじゃ、『法人』や『所得』の背番号の職員は幹旋がなくても食っていけるんですね」

「それがそうではないのです。早期退職勧奨の対象者はいわゆる管理職です。管理職はすでに実務から遠ざかっています。ご存知のとおり税法は複雑難解、しかも毎年改正されます。一線の税務署の職員でさえ、改正について行くのにかなり苦労します」

「なるほど。幹旋制度がなくなるということは大変なことだとやっとな理解できました」

「幹旋さえあれば、現役時代に培った人脈を利用して顧問先のニーズに応じることができます」
「そこで幹旋制度があるうちに辞める訳ですね」

副署長が黙って頷く。

「しかし、本当にそうなるのですか」

「間違いありません。それに……」

副署長が一旦口ごもると林はじつと次の言葉を待つ。

「……それに退職金が減るのです」

「えー。給料は減らされているし、ボーナスもカットされたでしょ。そのうえ退職金もですか」
「よくご存知ですね。これからは五十五歳になると給料は上がりません。そのうえ退職金は減ります」

「退職金は長く勤めれば勤めるほど増えるものでしょ」

「それがそうではないのです。早く退職した方が多い」

「そんな！ 本当ですか」

頷く副署長に気後れして林が言葉を切る。

「本当です。キャリア署長の子守は疲れますが、親身になって支えれば彼らだけしか知りえない情報を『ここだけの話』として教えてくれることがあります」

「斡旋の廃止や退職金の減額の情報ですね」

「そうです」

「この話を副署長は同僚にされたことは？」

「ありません」

「なぜ、私に？」

「当然じゃないですか。林さんに『ここだけの話』というのと、心許せる同期や支えてくれる

後輩に言うのとは次元がまったく違います。それに私自身、この『ここだけの話』の信憑性を証明する術を持っていません」

「厳しいものですね」

「後々『あのとき辞めて正解だったな』と言われても『親の介護で辞めざるを得なかった』とウソしか言えない」

「でも仕事を投げだすように見られるのでは」

「私には娘と息子がいます。何とかふたりとも大学を出しました。恥ずかしい話ですが、娘は結婚して子供を産みましたが離婚して今、娘と孫を引き取って私が扶養しています。息子は就職できずフリーターです。それに住宅ローンも残っています」

「そうですか。大変だな」

そのとき電話が鳴る。慌てて副署長が立ち上がると受話器を取り上げる。

「分かりました」

受話器を置いて副署長はフーツと一息入れてから林に深く頭を下げる。

「署長がお呼びです。今日はこれで失礼します。また、おいでください」

上着を着ながら副署長が林に退室を促す。

第二十九章
スティーブ・ゲイツ

逆田が少し緊張した面持ちで切りだす。

「重大なニュースをお伝えします」

あるテレビ工場の映像が現れる。

「ここは韓国のサムシング社のテレビ組立工場です。今や全世界のテレビの半数がサムシング社で製造されています。しかし、今異変が起こりつつあります。もう皆さんもご存知のとおり大量の不良品が市場に出回ったのです。しかも、国内はもとより全世界からクレームが起こったにもかかわらず、対策は後手後手に回り不買運動が怒濤のごとく広がりました」

サムシング社の創業者キム・イーチの肖像写真が映しだされたあと、まだ中年のころのキム・イーチがテレビの製造工場で陣頭指揮を執る古い映像に変わる。そのキム・イーチが握ったドライバーでテレビの裏カバーをネジ止めする工員の頭を殴る。振り返ったその工員にキム・イーチが罵声を浴びせる。

「手を抜くな！ 気持ちを含めてキッチンとネジを締める！」

「オヤジ、ちゃんと締めてますよ」

若い工員が反論する。キムはおもむろにドライバーを持ち直すとネジを締める。鮮やかな手さばきでまたたく間にテレビの裏カバーのネジを締める。

「比べて見ろ」

いつの間にか集まった工員たちがふたつのテレビの裏カバーを見比べる。

「違う」「違う」

誰もが同じ言葉を漏らす。

「オヤジさんのはネジ山が均一に埋めこまれている」

「電動ドライバーを使えば均一になるのに」

頭を殴られた先ほどの工員が口を尖らせる。

「バカヤロー！ 精密機器に電動ドライバーは邪道だ！ 気を抜かずに愛着心を持つてきつち

り絞める」

キムはそう怒鳴ると他の作業場に向かう。

「オヤジの言うとおりで。電動ドライバーの震動は電子部品に悪影響を与える」

キム・イーチは不意に工場に現れては怒鳴り散らす。すべての製品を自分の手で作り上げた経験が現場に向かわせる。そして乱暴な言葉とともに若い工員に手本を見せる。決して褒めはしないが、工員たちはキムの指導や指示を通じて育つ。そして現場で何かが起こればすぐに解決策を模索して指示する。そんなキムを現場の工員は「オヤジ」と呼んで敬愛する。そのような説明をしたあとと逆田が解説を続ける。画面にはキム・イーチの長男キム・ニーツウの顔写真が映しだされる。

「やがてサムシング社は上場して有力企業となったとき、キム・イーチは会長に退き、長男のキム・ニーツウが社長に就任しました。父キム・イーチの背中を見て育った彼は同じように現

場を大事にしましたが、父ほど工場に行くことは余りありませんでした」

キム・ニーツウの様々な映像が流れる。それに重なるような逆田の声がする。

「大企業になったので社長としての激務をこなすのが精一杯でした。それでも父親の指導で成長した現場の幹部や若い工員をねぎらうことにできるだけの時間を割きました」

工場を視察するキム・ニーツウが若い男女の工員に花束を贈る映像が流れている。

「これは社内結婚した工員を祝福するキム・ニーツウです。気さくな彼の雰囲気が遺憾なく表れています」

画面は一転してキム・ニーツウの長男、キム・イーチからすれば孫のキム・サンズのテレビ会見の映像に変わる。父であり会長となったキム・ニーツウの横で社長のキム・サンズは苦虫を噛み潰したような表情で天を仰ぐ。

「キム・サンズが現場の工場に赴くことはありませんでした。すでに祖父が育てた幹部工員は退職しています」

画面ではキム・ニーツウ会長、キム・サンズ社長が立ち上がって頭を下げている。

『『日本に追いつき追い越せ』というスローガンのもと、彼らはその夢を実現しました。しかし、今回の失態は日本の製造業が過去に犯した失敗と同じです。皆さんはどう考えますか』
プツンという音とともに画面が真っ暗になる。

*

「珍しいな。こんな切れ方は」

田中が苦笑いすると山本がクスクスと笑う。

「何がおかしいのじゃ」

立派な服の大家が山本を睨む。

「このテレビの前で今の映像のことを議論して、何らかの結論に達したら勝手に電源が入るの」

田中が大きく頷く。少し遅れて質素な服の大家も同調する。

「それでは議論するか」

「ちよつと待て！」

立派な服の大家がクレームを入れる。

「重大なニュースと言っていたがニュースというより記録映画のようだった。何かおかしい」

全員が立派な大家のクレームに納得する。

「確かに」

「それに議論しろと言っているけれど、『日本に追いつけ追い越せ』と頑張りながら、その日本の製造業が犯した過ちまで追いつけ追い越したなんておかしいわ」

「その『日本の製造業が犯した過ち』というのはなんじゃ」

「平たく言えば、こうじゃないかな」

田中は想像したことに自信を加えて言葉を続ける。

「現場を忘れた企業は大きな過ちを犯す」

「なるほど」

質素な服の大家の納得に田中は続けようとした言葉を中断する。

「組織が大きくなると現場との距離が遠くなって現場が見えなくなるということじゃ。なるほど、なるほど」

立派な服の大家が更に強い納得の言葉を漏らす。

「もう結論が出たから、そろそろ電源が入ってもいいんじゃないかな」

*

画面に日本の製造業の業績の一覧表が表示される。

「半導体メーカーは全滅じゃ」

「液晶パネルメーカーの方がひどい。もう赤字が五年も続いている」

両大家の声に田中がため息をつく。

「いつの間に日本のメーカーはダメになったんだ？」

画面は海外の製造業の業績に変わる。

「中国や韓国はすごい。それに東南アジアの勢いもすごいぞ」

「結構、北欧やEUの小国も頑張っている」

「アメリカは日本と同じだ」

「でも、jフォンやjパッド・オレのオレンジ社は時価総額で世界一だし、アメリカの企業は時価総額ベストテンに五社も入っているわ」

山本に反発するようにテレビを見ながら田中が高い声を出す。

「オレンジ社はアメリカ国内で製造していない。韓国と中国の工場で製造させている」

「アメリカの大統領が国内で製造してくれと頼んだけど断られたらしいのう」

質素な服の大家が割り込む。

「人件費が高いからだわ」

テレビから逆田の声が流れる。

「問題点が絞られたようです。さて皆さん」

各国工員の時給の一覧表が画面に表示される。

「ボナス、有給制度、社会保険料、それに税金も加味した各国の製造業の平均賃金です」

「意外と日本の賃金は高くない！ 高いのは社会保険料か」

田中が驚く。

「オレンジ社は国内賃金が高いのではなく、他の理由で自国での生産を見送ったのです」

そう言う逆田に一覧表を確認しながら山本が尋ねる。

「でも、アメリカの賃金は中国と比べて一桁高いわ」

「もちろん。でも国内の賃金格差が大きい。つまり貧富の格差がひどい」

田中は腕組みをしながら考え込む。両大家も首を傾げながら口をもごもごさせる。

「少し横道に入りますが、言う間でもなく日本の製造業は衰退しています。先ほどのキム・イチの話ではありませんが、あの孫のように現場を知らない経営者が財テクに走って本業の技術力で勝負しなくなった。そしてそのツケが回ってきたのです」

田中がその横道に誘われる。

「同感です。僕も同じようなことを考えています。その考えを披露していいでしょうか」

逆田の促す声がすると田中が続ける。

「成功したときの体験が邪魔になるのではなく、成功したときの技術が継承されずに現場から蒸発してしまった。それはこういうものを造れば便利で生活が楽しくなるという物作りの原点と言うべき発想を、現場の経験がないトップが持っていないのと、一方で価格競争や後発企業の追い上げでなおざりになった」

立派な服の大家が大袈裟に頷いてから発言する。

「トップになった一社のみが味わう追われる立場。追いつけ追い越せというそれまでと違った立場になると、つまり攻撃から守りになったときの弱さが露呈するのじゃ」

更に質素な服の大家が付け加える。

「そうすると韓国や中国の企業も衰退する可能性が高い。その中でかなり以前に日本に追い越された経験をしたアメリカは活路を見出したし、北欧やEUの小国には元々大きな企業がない

から競争という海で溺れずに泳ぐ方法を熟知している。いずれ日本もそうなるだろうが、それを妨害する者がいる。それは政府であり、既得権であり、古い法律だ。待てよ。これは誰かが言っていたセリフだったぞ」

「以前、このテレビを通じて申しあげたことがあります」

逆田の声とともに画面は若きキム・イーチが油まみれになって工場で働く映像が現れる。

「日本にもこのような経営者が数多くいました。それらの企業のうち夢を持った商品を製造したところは大企業となりました。しかし、そのうち経営者が変わって創業社長の遺産を食いつぶしてしまうと、その企業はいつの間にか衰退しました」

ここで立派な服の大家が小膝を叩いてテレビに向かって叫ぶ。

「昔、日本の経営者は自ら商品を手にしてアメリカやヨーロッパに売り込みに行ったもんじゃ」

「なかには製造したバイクに乗ってアメリカ中を走り回って売り込んだ創業者もいたのう」

質素な服の大家が大きな相づちを打つ。

「今、そんな経営者はいないなあ」

田中が両大家に水をさす。しかし、すぐに首を横に振って手を上げる。

「スティーブ・ゲイツだ！」

「そのとおりです」

逆田の声がする。

「話がだいぶん横道に逸れましたが、話題を戻します」

「そうだ。重大な発表があると言ってたぞ」

逆田の咳払いが聞こえる。画面はタイの工場で水浸しになった白いテレビの映像に変わる。

「この結果、我が社は一旦潰れました」

全員がその映像を見て頷く。

「このタイでのテレビの製造にオレンジ社のスティーブ・ゲイツの助言や協力があったのですが、今度は彼自身が韓国と中国のメーカーにこのテレビの試作品の製造を発注しました」

「なぜ日本の企業に発注しなかったんだ？」

田中が突っこむ。

「今、皆さんがご覧のテレビは非常に特殊です。後で分かったことですが、タイ工場で製造されたテレビのほとんどが、このテレビと同じ性能を持っていないことが分かりました」

「どういうことなの」

山本も膝を乗りだす。

「今までにない画期的な製品を造る力がもう日本企業にはなかったのです」

「……」

「現状は韓国や中国の方が未知の技術に挑戦する意欲が高いのです。iフォンが中国で製造される理由がここにあります」

「情けないな」

このとき画面が真っ暗になる。

「急に電源が切れた」

「いえ、切れていないわ」

山本がリモコンを持つとボタンを操作する。しかし、画面は黒いままだ。山本の額に汗がにじむ。

田中が心配そうにテレビの画面と山本の横顔を見る。

「これは……訃報が入ったんだわ。とても悲しい訃報が……」

画面が黒からグレーに変わる。そして逆田が現れる。色はなくモノトーンの画面の中で逆田がうなだれている。

「悲報が入りました。スティーブ・ゲイツが死亡しました」

画面はスティーブ・ゲイツが最新型のjフォンを手に華々しく宣伝する映像に変わる。そして顔の前にjフォンを差し出してから高々と頭上に上げたとき口から赤い液体が噴き出す。喀血したのだ。jフォンが落下して床に落ちると、スティーブ・ゲイツが床に倒れこむのが同時だった。

「何という光景じゃ」

*

テレビには生前のステューブ・ゲイツの数々の映像が流れる。

「このテレビの製造が不可能になりました。残念なことです。いえ、このテレビのことより、それ以上に悲しむべきことは、物作りへの真摯な探究心、挑戦心を持った唯一の偉大な体現者を失ったと言うことです」

両大家は冷静に画面を見つめる。山本が目頭をハンカチで押さえると涙声を出す。

「おっさんなのに、なぜか気迫があった。何回も新製品のプロモートを取材しましたが、感激しなかったことはなかったわ」

「若い女性を新車の横に並べて写真を撮らすのとは格段の差があるのう」

質素な服の大家が慰めの気持ちを込めて漏らす。

「もちろん、ステューブ・ゲイツが油にまみれてiフォンを造ったのではないけれど、彼のアイデアのすべてがああ小さなスマートフォンに詰め込まれていた。あの自信に満ちた新製品発表会は伝説になるかも」

田中の声にテレビが反応する。

「とにかく惜しい人をなくしたものです。人類の歴史上、最も偉大な人物になるでしょう」

第三十章
領土拡大

ステイブ・ゲイツの急死に落胆した田中、山本そして両大家の気持ちたちが落ち着いたころ、

一旦切れていたテレビに電源が入る。そしてかなり高いところから撮った映像が画面一杯に広がる。すぐ田中が反応する。

「日本？ 日本だ。こんなに大きな国になるなんて」

「日本は世界一の資源大国になりました。速報値ですが、原油や石炭などの化石資源の埋蔵量は世界一位。レアメタルではこれまで全世界の九五パーセントを算出していた中国に匹敵する可能性が非常に高いでしょう」

「もう中国に脅かされずに済むぞ。それにレアメタルの入手に苦勞していた国々を助けることもできるのう」

質素な服の大家の顔がほころぶ。しかし、逆田の冷たい声が返ってくる。

「ところが、そうはいかないのです」

「すぐに採掘できないのか？」

画面の画像に海が後退する前の日本列島の輪郭が赤い線で重ねられる。

「そうではありません」

逆田のじれったい応答に立派な服の大家が業を煮やす。

「自分の庭でレアメタルを掘り出すのに何が問題なんじゃ」

「中国政府によると、全部とは言わないが日本政府が自国の領土と主張するほとんどは元々公海上の海底で、そこから採掘された資源は世界中の国々の共有資源だと主張しています」

「なんと！」

興奮する立派な服の大家を逆田がなだめる。

「海上なら中国海軍が活躍するでしょうが、中国本土から数千キロも離れた元太平洋の海底まで中国陸軍が進行するのは不可能です。しかもぬかるんでいて、ヒマラヤの頂上から降りるような急峻な下り道です」

「要はご託を並べて牽制しているだけじゃ」

落ち着きを取り戻した立派な服の大家が安堵の息を漏らす。

「ここで安心は禁物だ。日本とて同じじゃないか。レアメタルの採掘は簡単ではないぞ」

「ところで、ここに来て中国は世界中の反捕鯨国から猛烈な批判を受けています」

「確か中国は捕鯨国ではなかったはずじゃ」

「急に捕鯨国になったのです」

全員が顔を傾げる。

「タクラマカン海？ タクラマカン湖？ で捕鯨が始まったのです。元タクラマカン砂漠に海水はおろか魚や鯨まで現れたのです。鯨や魚を食べる習慣はなかったのですが、内陸部は食糧事情が悪かったのですぐにこれらを栄養源にしたのです」

「魚はともかく、どうやって鯨を捕ったのですか」

「その前にひとつ、面白い話があります」

今度は全員膝を乗りだす。

「日本は反捕鯨国から抗議を受けることはなくなりました」

「？」

「なぜなら鯨を仕留めるキャッチャーボートが座礁して動けなくなって捕鯨どころではなくなつたからです。つまり海面がどんどん低下したので急いで日本に戻ろうとしたのですが、途中で座礁してしまつたのです」

「皮肉なことじゃ」

「キャッチャーボートの乗組員は？」

「何とか、航空自衛隊が救助に向かおうとしました」

「海上自衛隊では無理だなあ」

「ところが総理大臣はもちろん防衛大臣も、要はすべての大臣そして事務次官などの高官が海面急降下という異常事態を前にして逃げ出したので、自衛隊は迅速に対応できませんでした。もちろん救助すべき船舶が多かつたため、キャッチャーボートの救援まで手が回らなかつたのが実情です」

「例の情けない職場放棄の話か」

「質素な服の大家が憤る。」

「さて皆さん。ここで中国空軍が登場します」

質素な服の大家の顔が引き締まる。

「彼らは長距離大型ヘリコプターを大量動員して乗組員を救助するとキャッチャーボートも吊り下げて日本ではなくタクラマカン海まで連れて行きました。そして乗組員を助けた見返りに鯨の仕留め方を教えるように要求したのです」

「なんと！」

質素な服の大家が思わず叫ぶ。

「やり方が大胆というのか、日本の政治家や官僚がまったく思いつかない発想じゃ」

「戦後の日本の政治家や官僚も結構ビックリするようなことをしていたのう」

ふたりの大家が顔を見合わせて笑う。田中も山本も、そしていつの間にか姿を見せたテレビの中の逆田も、なにがおかしいのか分からず不思議そうに両大家を見つめる。

*

「確かに領土が増えたのは大変喜ばしいことだけれど、鈴木一佐が言っていたように広い国土を守るのは大変だ」

「むしろ、砂漠が湖や海になった中国の方が得をしたみたいに見えるわ」

田中と山本に立派な服の大家が追従する。

「そうじゃな。反捕鯨団体もタクラマカン湖まで行って捕鯨の妨害はできんな」

「そのとおりね」

山本が微笑む。

「でも、これからどうすればいいんだ」

「鈴木一佐は国連で忙しいし、とにかく日本には司令塔がないわ」

テレビが明るく輝くと巨大なシヨベルカーやダンプカーが大きな音をたてて動き回る映像が飛びこんでくる。逆田の声だけの説明が始まる。

「すでに韓国と協力して大分県から元大陸棚の先端まで道路が開通しました。両国の土木建設関連の、そして鉱工業関連の企業が協力して資源の採掘活動に入りました。日本が無政府状態になったことが幸いして鈴木一佐が韓国からの提案を受け入れたのです」

ヘリポートと滑走路の建設が進められている映像に変わる。

「どんな提案があったのかと言いますと、『地続きになったのも何かの縁。過去なんかどうでもいい。東に向かって希望を手に入れよう』つまり『東方希手の精神で前進しよう』という提案です」

「『東方希手』？ 誰の提案なのですか」

山本の質問に響く声がする。

「よくぞ聞いてくれました。サムシング社の創業者キム・イチです。かなり高齢ですが……」
キム・イチの記者会見の様子が映しだされる。取材するのは逆田だった。

*

「キム・イーチさん。私は……」

キム・イーチが逆田の言葉を遮る。

「あなたのことはよく存じあげております」

逆田は驚いて一歩引く。マイクを持つ逆田の手を引くとキム・イーチが頭を下げる。

「真実を伝えることが使命だというあなたの考えに私は感激しました。オレンジ社のステイブ・ゲイツの急死は悲しむべき大事件でした。私もサムシング社は彼のアイデアが詰まったテレビの製造に大きな期待を寄せていましたが、叶わぬ夢となりました。しかし、今、違った大きな夢が目の前に現れました」

逆田の手が解放されると、逆田も深く頭を下げてから声を出す。

「閉塞感に満ちた後ろ向きのムードが漂うこの地球に明るい未来があるとおっしゃいますが、具体的には？」

「中国、ましてや北朝鮮にどう、こうということではありません。逆田さんの放送局の後押しになるかも知れないステイブ・ゲイツのアイデアが込められたテレビはすでに中国で製造段階に入っています。むしろ我々は開かれた未来の象徴である海底資源の探索に切り込むべきです。宇宙開発も大事ですが、足元の海底、今や目の前に現れた元太平洋の海底に向かって我が国と日本は持てる技術をすべて投入して共に前進しましょう」

周りから割れんばかりの拍手が上がる。拍手が鳴り止むと逆田はマイクを握り直しておもむ

ろにキム・イーチに語りかける。

「それに、もうひとつ大きな期待があります」

「それに？」

キム・イーチがにこやかな表情で逆田の言葉を待つ。

「地震のメカニズムが解明されるかも知れません」

年老いたキム・イーチのどこに力があるのかと思わせるほど逆田を抱きしめる。

「そのとおりだよ！ 海底地震のメカニズムが分かれば、地震の予知も可能だし、場合によっては地下にたまったエネルギーを事前に解放できるかも知れない。それどころかそのエネルギーを利用できれば……ゴホ、ゴホ、ゴホ」

ここでキム・イーチが興奮の余り咳きこんでしまう。慌てて逆田はマイクを床に放りだしてキム・イーチの背中をさする。

「大丈夫ですか」

キム・イーチの付き添いが椅子を用意すると抱え込むようにして座らせる。そのひとりが水を入れたコップを差し出す。しかし、キム・イーチは弱々しく払い除けるとかれた声を出す。

「逆田さん。私の言いたいこと分かりますか？」

逆田は腰を曲げて床のマイクを取り上げると頷く。

「地震が起こったら、何とかそのエネルギーを取りこんで活用する」

キム・イーチが大きく頷く。逆田が満面の笑みで続ける。

「災い転じて福となす」

付き添いの制止を振り切ってキム・イーチが立ち上がると鮮明な声を上げる。

「すでに我がサムシング社のテレビ製造技術のすべてを中国に無償移転した。ステイブ・ゲイツが成し遂げられなかった未来テレビが中国で日の目を見ることになる」

キム・イーチはそう言い終えると逆田にもたれ掛かる。

「キム会長！ 気を確かに」

「逆田さん……」

キム・イーチの声が急のトーンダウンする。

「私は今からステイブにこの計画を伝えに行く」

マイクを放り投げると逆田はキム・イーチを抱える。

「会長！」

逆田はひざまずきながらキム・イーチを激しく揺さぶる。そして仰向けにして渾身の力を込めて胸を押す。半分開いた口元はまるで笑っているように見えるが、空気の出入りはまったくなかった。

第三十章 領土拡大

第三十一章
新しい指導者

「スミスの仕業に違いない」

田中が断言する。

「そうだとしたら私の想像を超える大人脈を持っていることになるわ」

田中、山本、両大家の目の前のテレビと同じものが中国の工場で量産される光景を興味深く見つめる。いきなり立派な服の大家が山本の見解を支持する。

「どのようにしてキム・イーチの考えを知ったのか分からんが、中国の総書記にこのテレビの製造の話を持ちかけたのは恐らくスミスじゃ」

「しかし、中国政府はこのテレビの本当の性能を知っているのかしら」

「じゃが、このテレビは田中さんがいなければ電源は入らんはずじゃ」

ここでテレビから逆田の声がする。

「残念ながら水没したタイで量産したテレビもそうですが、ステイブ・ゲイツが新たに設計したこのテレビは誰でも見ることができます。リモコンはついていませんが、iフォンがリモコンになります」

「と言うことはiフォンやiPad・オレと連携するんだ」

「そうです。さすが田中さんですね」

「iフォンで撮った写真や動画がこのテレビに転送されて、しかも編集されてスライドショーや動画の鑑賞ができるかも」

田中が興奮すると逆田が制する。

「さて、どんなテレビか、後のお楽しみです。次のニュースをお伝えします」
いきなり画面は橋本市長の会見に変わる。

「私が主催する『以心伝心の会』は政治空白を埋めるために国政選挙に打って出ることになりました。『以心伝心八件伝』^{はっけんでん}という政治理念に基づいて『政府が構築すべきボランティア活動一七項目』をマニフェストにしてすべての選挙区に候補者を立てます。そのとき私は市長を辞任いたします。市民の方々申し訳ありません。お許しください」

ここで橋本はマイクを置くと立ち上がって腰を折り深く頭を下げる。そして正面を見ずえるとマイクを取り上げてそのまま話を続ける。

「決して私のわがままで辞職し国政を目指すではありません。ボランティア活動の対象を一市町村から国全体に拡大するだけです。本来、政治家、官僚、公務員はボランティアです。民間企業や個人企業でも、そこで勤める人たちは無報酬でボランティア活動をします。ましてや……」

若い橋本の落ち着いた態度に質素な服の大家が感心する。

「こんなことがありました。ある区役所前で煙草の吸い殻やゴミを拾い集める人たちがいました。私はその人が区役所の職員だと思って『職員の意識も変わった』と感激したのです。ところがその人たちは区役所の隣の粗末な建物に入ったので驚いて声をかけました。なんとその人たちは区役所隣の零細企業の社長と従業員だったのです。会社の前だけではなく、両隣の建物の前まで清

掃していたのです。それがこの会社の方針で休日は社長と奥さんが清掃している。区役所の職員じゃなくて隣の会社の人ゴミを拾っていた。区長に内緒で職員に尋ねると区役所前の清掃は自分たちの仕事ではないし、勤務時間前に出勤して清掃しても給料とは関係ない。清掃も仕事だというなら時間外手当をよこせと言う。私は絶句して『公務員である前に人間であることを忘れるな!』と怒鳴ってしまいました。もちろん体罰は加えていません。よく怒鳴り散らすのでいつの間にかパウハラ市長というあだ名が付きました」

落ちを付けると橋本は深々と頭を下げて座る。

「橋本さんの言うとおりじゃ。思えばギスギスした社会にしたのは政治じゃ。ふーっ!」

立派な服の大家がため息を漏らす。画面が消えて一瞬静寂に包まれる。それほど立派な服の大家のため息は強烈だった。

「孫が可愛いのはもちろんじゃが、息子たちが相続税対策に孫に贈与した方がいいと言うので、五人の孫に毎年、三百万円ずつ贈与している。ときの首相が母親から毎月、何千万円も贈与されていたのとは桁が違うが……」

質素な服の大家が瓜二つの立派な服の大家に首を振る。

——こいつ、本当にわしの分身なのか。わしには孫はおらん

「いつの間にか孫たちは大学を卒業して社会人になった。さてあるとき孫から電話が掛かってきた。そういえば今まで贈与しても、もちろん幼いころは仕方がないが、礼を言われたことがなか

ったので、ひよつとしてと期待したが、驚くなかれ、孫の言葉は『今年の振込はいつ?』というものだったのじゃ」

立派な服の大家が涙ぐむ。

「前政権は年寄りが資産を持ったままお金を使わないから経済が活性化しないと行って、相続税を高くする一方で贈与税を優遇して、年寄りから若者に贈与させてお金を使わせる政策を実行した。挙げ句の果てに教育費として孫に三千万円贈与しても無税とした。こんな大金を贈与する老人などほんの一握りで、これで儲けたのは優遇税制の手続きを受けた信託銀行と私立大学の医学部だけじゃ。経済優先で親子や孫の道徳心、つまり人間性を無視したのじゃ。これじゃ日本という国が良くなるはずがない。教育や道徳や愛国心が大事だと声高にのたまうだけで、こんな税制を押しつける政府なんか潰れてしまえと思った途端、首相以下、政府の責任者は消えてしまった」

貧乏だった祖父母や両親を思い出して田中も涙ぐむ。質素な服の大家がそんな田中の気持ちをくみ取って立派な服の大家の言いたいことを引き継ぐ。

「気持ちの通った言葉なんてまったく政治家にはない。都合が悪くなるといつでも検討中だ。検討すると言うだけで永久に結果を出さない。だから永遠に信頼を失った」

立派な服の大家が質素な服の大家の手を握る。

「その点、橋本市長の意見は非常に分かり易いし、しかもすぐ実行する。それに本音も吐露する。勇み足もあるが修正も速い。市民全員を幸せにすることは不可能じゃが、痛みを分かち合って何

とか不満を可能な限り減らそうという努力は高く評価されるべきじゃ。市政に住民の信頼感が戻って自由闊達な議論が高まったのは彼の最大の功績じゃ」

立派な服の大家の意見に誰も口を挟まない。それは質素な服の大家も田中も山本も橋本市長のことを知らないからだ。

「是非、取材したいわ！」

山本が感動して提案すると立派な服の大家が胸を叩く。

「わしに任せろ。橋本市長は後援会を造らない。市民全員が後援会員だと豪語するが、それは特定の市民に肩入れしないためじゃ。しかし、彼も人の子。応援してくれる市民を遠ざけることはない」

*

「大家さんはボランティア精神の塊みたいな人です」

簡素な市長室で橋本市長が立派な服の大家に謝意を示す。

「大家さんの自宅の敷地から大量のレアメタルが発見されて採掘許可を市に申請されたとき、前例がないと断りましたね」

橋本はインタビュしようとする山本を無視してなつかしむように談笑する。

「あるとき市長は『これで日本一、金持ちの市になる』と叫んですぐ許可してくれました」

「ちょうど尖閣列島での事件で中国からレアメタルの輸入が制限されたときでしたから、タイミ

ングが良かった」

「そうじゃった。でも市長は困っているメーカーに暴利を貪らない価格で供給するのならという条件を付けられた」

「覚えています。いえ、忘れもしません」

「わしは得体の知れないレアメタルが我が敷地から消え失せるのなら、ただでも良いと思っていながら、すぐ了承したのじゃ」

「それでも大金が入りましたね。大家さんは惜しげもなくその大半を市に寄付された。お陰で老朽化した病院や学校を修繕したり建て替えたりできました」

「そのあと市内の経済が活性化したので、わしの土地も値上がりして思いもしない大金を手に入れた。なにしろ土地の売却益に対する税金はいくら儲けても所得税と住民税合わせて二十パーセントで済むんじゃ」

「通常はたくさん稼ぐと五十パーセント以上ですからね」

「安くなった三十パーセント分の税金に見合うお金を被災地に寄付しようと思ったが、我が街に寄付するのと違っていつ誰にどれだけ寄付金が渡るのかよく分からんで躊躇した。そのとき橋本市長が『市から被災地に寄付しましょう。全国市長会で討論してどの被災都市にどれだけ寄付をするのか議論して実行しましょう。逐一報告しますから安心してください』と提案されたのじゃ。わしはすぐ寄付した」

「地震で被災した地域は広範囲です。だから『復興予算をどこに投入するかは非常に困難だ』と政府は言うが、それはいい訳です。地方に、特に被災した地域には人材がいません。警察や消防はもちろん行政そのものが機能していません。職員が亡くなったり被災したりしているからです。自治体を奴隷のように扱うことなく国が対応しなければならいものになかなか動かない。それどころか被災した県知事や市長を恫喝する大臣もいた」

橋本がうつすらと涙を流す。

「まるで被災地の自治体は田舎者扱いでしたね」

ようやく山本が口を挟むとすぐさま本論に入る。

「地震から一年経っても国会では何も決まらなかった。『あらゆる選択肢を排除せず迅速に対処するために忌憚のない意見を出して頂くとともに精査検討してすみやかに被災地の復興に備えたい』と言うだけ。いつまで経っても『備え』の姿勢のまま。具体的にこれとあれをこうして即日実行するなんて聞いたことがありませんでした。その点、橋本市長の発言は明瞭で実行力があります」

「当たり前のことをしてしているだけです」

橋本が視線を山本に移す。

「なぜ、この国は当たり前前ことができなないのでしょうか」

「それはやらなければならぬことを具体的に言うとは批判する者が必ず現れるので、怖くて言えないからです。つまり利権です。過去のしがらみです」

「味方を作るより敵を作りたくないと言うことですか？」

「強い信念を持って国民や市民を引っばるといことは、イコール独裁という考えを持つ人がいる。戦前の日本の過ちやドイツやイタリアで登場した独裁者のイメージがトラウマになっている。時代が違うのに未だ百年近い古い出来事を持ち出して私にダブらせる。でも私は大統領でも首相でもありません。一地方都市の市長です」

「確かに戦前、戦中の日本を含め同じ頃、ドイツやイタリアの指導者は軍備の増強を主張して自分の地位を強固なものにしようと邁進しました。でも市長には軍備を増強できる権限はありませんね」

山本がマイクを橋本に向け直す。

「もちろん。今は弱者をどう救うのか。つまりどのようにして失業者に仕事を与えて経済を浮揚させるか。更に余力がなくても海外で災害が起これば自国の利益を顧みることなく救援活動するにはどうしたらいいのか。このように当時とは事情がまったく違うのです。第一、市長の任期を二倍にしようなんて考えてもしません。任期を延ばすというのはまだ可愛い方で、独裁国家の指導者は終身制で交替という制度がありません。かといって首相や大統領の地位をたらい回しするのもダメです」

「この街の市民は生き生きとしていますね」

「大家さんは別格としてこの市の被災地への寄付金は総額でも一人当たりでも日本一です」

「人情の厚い市ですね」

市長が急に苦笑いする。

「ところで恥ずかしながら私は寄付していません」

「えー？」

「被災地のために寄付をと言いながら一円もしていません。無給で働いているからです。預金を食いつぶして妻や子の生活を支えています。こんな独裁者がどこにいますか」

「しかし、しっかり仕事をするといい寄付を市民に、そして結果的には被災地に大きな寄付をしていることになるのじゃ」

立派な服の大家がカバーする。山本は頷きながらインタビューを続ける。

「当時の首相は増税に際して公務員の給与を下げましたが、議員歳費の引き下げはおろか、定数削減もしませんでした。これについて無給の市長の考えは？」

「国民はとくに気付いているのに、その国民を何とか敵にしないよう抽象的な発言に終始する。国民のためだと言うが自分を守っているようにしか見えない。そして地震が起きて津波と原発事故が起これると無策ぶりが露呈して、更に海面が後退するという天変地異が起これると……その結果はすでにご存知のとおりです」

「敵前逃亡ですね」

「違憲判決が出されている選挙をしたって無効になるでしょう。ましてや選挙演説すれば玉子や

トマトを投げつけられるのが関の山でしょう。そして国政に打って出ようとする私を独裁者呼ばわりするのがせめてもの慰めなのでしょう」

「私のインタビューは無意味ですね。これほどはっきりと物事の道理を簡潔明瞭に説明して頂いたのでは」

「そんなことはありません。それこそ簡潔明瞭にインタビューされたから、自然に言葉が出たのです。長々と何を聞きたいのか分からない取材が多い中、こんなに気持ちのいい取材は初めてです」

山本が小膝を折って深々と橋本に頭を下げる。

*

「はつらつとした気持ちのいい市長ですね」

まだインタビューの余韻に浸る山本が市役所前の歩道で晴れ渡った空を見上げる。その山本に立派な服の大家が水をさす。

「逃げ出した政治家どもが再び国政に立候補するようじゃ」

「橋本市長が首相に立候補して当選したら日本は独裁国家になると中傷するでしょうね」

「それなら、あるとき逃げなければよかったんだ」

田中が憤慨する。

「鈴木一佐は橋本市長より年上だが、彼も大した人物だ」

質素な服の大家が久しぶりに発言する。

「前政権で影の総裁と言われた大沢も大沢チルドレンという若い議員をたくさん当選させた。若い政治家を育てることはいいことだ。ただし、わしは大沢が気に入らん」

「大沢と橋本市長では決定的に違うことがある！」

田中が憤慨を興奮に変える。

「橋本は若い。大沢は年寄りじゃ。わしよりは若いが」

「そうですね。大沢は『当選したければわしの言うことを聞け』という感じでした。橋本市長は『みんなで知恵を出し合って一緒に頑張ろう』という感じですね」

「山本さんの言うとおりだ」

「それよりもっと大きな違いがある」

今度は冷静に田中が問う。視線が再び田中を集まる。

「インターネットで調べると金に関するスキャンダルが橋本市長にはない」

「大沢の周りは金、金、金じゃ」

大金を手にした立派な服の大家の発言には重みがある。

「億単位もの金を管理できないことを棚に上げて『自分の仕事は政治で金はすべて秘書に任せている』と言い訳しておるが、庶民を愚弄するにもほどがある。仮に無罪になっても許せん」

質素な服の大家も同調すると田中が尋ねる。

「経理担当者に任しているから税金のことは知らないと云えば税務署は許してくれるんですか？」

「あほ。そんなことはない。庶民感情からして許されるはずがない」

「大沢は官僚より政治家の方が庶民感覚をしつかりと持っていると言つてたが、ちゃんちゃらおかしい。多額の不正献金や賄賂を貰つたりする政治家と高級官僚は同じ穴のムジナじゃ」

「そのとおり！ むしろ下級官僚の方が庶民感覚を確実に持っているぞ」

「どうして？」

山本の疑問に質素な服の大家がニヤツと笑う。

「下級官僚の不正額はほとんどの場合、知れておるからだ」

すぐさま立派な服の大家が付け加える。

『『よくもこんな端金はしたかねで一生を棒に振るなんて』というケースが多いじゃろ』

「なるほど、まったくそのとおりだわ」

「被災者は給料がカットされるし、いつ首になるかも分からない。そして二重ローンで苦しんでいる。金では買えないものがこの世の中にはあるということを、戦後の成長期を経験した者、特に年取つた政治家は考え直さなければならん」

「そのとおりじゃ。戦後の苦しい時代は隣近所の機微きびに満ちた環境があつた。でもそれが徐々に消滅したことを年寄りには目の当たりに体験したのに金に頼るとは何という浅ましいことじゃ！」

「政治家が率先してギスギスした世界に国民を誘導したのに、選挙を通じて是正できなかったの

も確かだわ」

「今や世紀の最悪の重大事件が重なって、身の危険を感じたすべての大臣と高級官僚が揃って辞めてしまった」

田中の言葉に全員納得する。

「さあ、アパートに戻りましょうか」

「逆田さんが首を長くしてテレビの中で待っているぞ」